

題名 僕が好きな海

作者名 毛利 勇真（もうり ゆうま）

学校名 明石市立衣川中学校

学年 三年

僕は海が好きだ。だけど泳ぐのが得意とかいうわけじゃない。釣りなんて経験もないしサーフィンやダイビングもやったことない。魚は好きだけど、そういう意味で好きなわけでもない。船オタクってのもまったく違う。

僕は静かであつまらない、そんな海が好きだ。

中学2年生の秋、散歩に行くようになった。2学期も中盤、そろそろ進路について考える時期になった。高校がどこだとか成績はどうだとか、皆が口々に騒ぎだす。僕は一人だけ取り残されたような感覚がしていた。そこで散歩に行くことにした。体を動かすのも面倒だし、かと言って家にいれば、勉強と将来のことで頭がパンクしてしまう。端的に、かつ大げさに言うなら、現実逃避がしたかった。

駅前前の街に行ってみた。車の駆動音に信号の青を教える電子音。カツカツと音を立てるヒールと楽しそうな話し声、路上演説に路上ライブと騒がしい。夜になれば、道路沿いにキツチリ並んだ電灯と看板が、道を照らす。

一言で言うなら、疲れた。確かに気自体はまぎれた。だけど家に帰れば嫌でも思い出すし、結局何も変わらない。その日はただただ疲れただけだった。

海に行くことにした。どこに行っても川と海が視界に入る明石では、行くのにそう時間もかからない。思い立ったが吉日、僕は早速出かけた。

海、それも寒くなってくる秋ともなると、人通りも少なく、寂しい雰囲気になっていた。サクサクと心地良い音を鳴らす砂浜に、少し荒めの波が耳に響く。砂浜に腰を降ろして、少し遠くに見える淡路島をポーッと眺める。鳥が水上から飛び立って、水飛沫がほのかな夕日を吸い込んで、数瞬淡く光る。フェリーの汽笛がポーと遠吠え、水面を浅く切り開き波を強める。

傍目から見れば、退屈そうに海を見つめる変人だろう。僕自身も、別に楽しいと感じていないわけじゃない。初めて感じる、不思議なその感覚が体に染み込んで、心地良かった。

規則的な、絶えることのない波の音。夕日が沈んでいき、少しずつ顔を見せる月と星。時々水面を跳ねる魚に驚いたり、朧気に光る船を追いかけたり、黒く塗り潰されて恐ろしげに見える淡路島のシルエットを見つめたり。そのうち、急に我に返って「なにしてんだろ僕は」と思っただけで家に帰った。

特別なことをしたわけじゃない。ただ海に行ったただけだ。それなのに、ずっと重かった肩がフツと軽くなった。よく言うのは「海の広さに比べたら、自分の悩みなんてちっぽけに思えた」というやつだろうか。全然違う。自分のこれからの生き方を決めていく大事な悩みだ。ちっぽけなんて思えるはずがない。

だけど、こんなことができる内はまだ大丈夫だろうと、そんな風に思った。水面を跳ねる魚を今か今かと待ちわびたり、一握りの砂利を放り投げて、音を楽しんだりした。そんなちっぽけな事が楽しめるのなら、今はまだ、そんなに辛くないと思えたのだ。

この作文を書いている間にも行った。冷え込んできた十二月、風が思ったよりも強く、厚着してこなかったのを悔やむ。うち寄せる波が意外と深くまで砂浜に食い込んでいた。近くまで来ていた波に手を浸からせる。案外温かった。濡れた手が、冷たい風のせいで一気に冷える。凍りついたように動きが鈍くなる手が磯臭くならないように、近くの水道で洗う。

冬の海は凍てつくように冷たい、という表現は嘘で風のせいなんて、つまらない発見をした。何も変わらない、つまらなくて、静かな海。綺麗そうな表現をしても、ただの水飛沫だしそこらを通るただのフェリーだ。それだけでしかないのに、何故だか海は魅力的なのだ。明石の海に限った話でもないし、ただの個人的な感想だ。

ただそこに在る、何も変わらない退屈な海。僕はそんな海が、変わらない海が、大好きだ。